Title	「まれに」とrarementの対照研究(1)
Sub Title	Etude contrastive de "mareni" et de "rarement" (1)
Author	喜田, 浩平(Kida, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.39 (2004.) ,p.93- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20040930-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「まれに」と rarement の対照研究 (1)

喜 田 浩 平

What is the meaning of a word?

Let us attack this question by asking, first,
what is an explanation of the meaning of a word;
what does the explanation of a word look like?

Ludwig Wittgenstein, *The Blue Book*

はじめに

日本語の「まれに」をフランス語で rarement と訳すことは適切だろうか。和仏辞典は両者に対応関係を認めているようだが、翻訳テキストを仔細に観察してみると事情はそれほど単純ではない。いくつかの意味論的概念を整理することで、この問題に答えてみたい。

なお、論述の途中から日本語の分析が中心になり、「対照研究」と題した論考にしてはフランス語からやや離れてしまう点をご容赦いただきたい。また、本稿の議論を進める過程で興味深い問題が数多く発見された。その一部は別稿で論じる予定である。

1. 「まれに」の仏訳

「まれに」という日本語をフランス語に訳す場合、どのような表現を使うことができるだろうか。まずは現行の主要な和仏辞典を参照してみよう。『スタンダード和仏辞典』（大修館書店、1970）、『コンコルド和仏辞典』（白水社、1990）、『プチ・ロワイヤル和仏辞典』（旺文社、第2版2003）はいずれも「まれ」という見出し語を立て、その項目の一部として「まれに」を扱っている。

訳語としては3冊とも *rarement* と *exceptionnellement* をあげ、さらに『コンコルド』と『プチ・ロワイヤル』は *peu souvent* にも言及している。*peu souvent* は後述のように仏辞典で *rarement* の定義として定着している表現であるため、ほぼ同義と考えてよさそうであるから、考慮しないことにしよう。また *exceptionnellement* と「まれに」の関係も非常に興味深いものではあるが、それ自体独立した論考に値するような大きなテーマなので、本稿では割愛する。以下では、「まれに」と *rarement* に議論を限定する。

さて、和仏辞典は「まれに」と *rarement* を対応付けているわけだが、果たしてこれは適切な判断だろうか。この点を確認するために、実際の翻訳の現場で「まれに」がどのように扱われているのか見てみよう。試みに、日本文学のテキストとその仏訳を用意し、「まれに」とその対応箇所を比較するという作業を進めてみた。すると、実際に *rarement* と訳しているケースも無いわけではなかったが、それ以外の例も数多く見つかった。その中で最も興味深いものが以下の2例である。(漢字、仮名づかいは現代風に改めた。「まれに」は下線で示し、仏訳で「まれに」に対応すると思われる部分を太字で強調した。)

- (1) 御米はそれを冗談とも聞き、また本気とも聞いた。稀には隠れた未来を故意に呼び出す不吉な言葉とも解釈した。(夏目漱石、「門」、『漱石全集』、第6巻、岩波書店、1994、p.608)
- (2) Oyone prenait cela parfois au sérieux, parfois à la plaisanterie. **Il lui arrivait aussi de temps en temps d'interpréter ces paroles de mauvais augure comme un effort de Sôsuke pour forcer le destin à montrer ses cartes.** (Sôseki, *La Porte*, tr. par Corinne Atlan, Editions Philippe Picquier, 1992, p.227)
- (3) しかし稀に夢の中では、暗黒に蠢く怪物や、見えない手の揮う剣の光が、もう一度彼を殺伐な争闘の心につれて行った。(芥川龍之介、「老いたる素戔鳴尊」、『芥川龍之介全集』、第4巻、岩波書店、

1977、p.81)

- (4) **Il arrivait parfois que**, dans ses rêves, lorsqu'un monstre bougeait dans l'obscurité ou lorsqu'il apercevait l'éclat d'un sabre agité par une main invisible, sa férocité d'autrefois se ranimât. (Akutagawa Ryunosuke, «Les vieux jours du vénérable Susano», in Akutagawa Ryunosuke, *Rashomon et autres contes*, traduit par Arimasa Mori, traduction relue par François Toussaint, Gallimard, coll. «connaissance de l'Orient», 1965, p.115–116)

この2つの翻訳は arriver の非人称構文を中心に、頻度を表す副詞表現が付け加えられている点で共通している。arriver は出来事の生起を意味するもので、ここでは特に問題にはならない。注目したいのは副詞表現である。というのも、直感的に de temps en temps と parfois は rarement と対立するニュアンスを含んでいるように思われるからである。この感覚が正しいならば、和仏辞典の「まれに」の捉え方と、翻訳の「まれに」の捉え方が大きく異なることになる。この点を判断するために、いくつかの概念を整理しよう。

2. 「頻度」と「方向性」

まず「頻度」の概念から始めよう。「頻度」とは、同じ出来事がある一定期間の中で繰り返し起こる度数のことである。特にその回数に注目し、何らかの基準に照らし合わせて回数が多いと判断されれば頻度が「高い」とされ、回数が少ないと頻度は「低い」と言われる。なお、この「基準」には様々なものがあり、社会通念や一般常識、統計的に算出される平均値のこともあれば、話者の個人的思い込みのこともある。また「多い」「少ない」も話者の主観的判断による場合が多い。

様々な頻度に応じて、その表現手段が言語には準備されている。高い頻度表現と低い頻度表現を分類すると、日仏語で次のようなものがあげられる。

高い頻度を表すもの

日本語：しょっちゅう、いつも、しばしば、よく

フランス語：souvent, fréquemment, toujours

低い頻度を表すもの

日本語：たまに、ときどき

フランス語：quelquefois, occasionnellement

さて、「頻度」の概念が少し明確になったが、本稿の議論にはまだ不十分である。というのも、rarement と de temps en temps, parfois, そして「まれに」のすべてが低い頻度表現であるという共通点は確認できるが、それ以上の違いについては語れないからである。そこでもう一つ概念、「方向性」を導入しよう。

よく知られているように、フランス語の un peu と peu は、客観的には同じ量を表現することがあっても、その捉え方が大きく異なる。例えば、軽い食事を摂った後で、フランス語で J'ai un peu mangé と言うことも J'ai peu mangé と言うこともできる。しかし後者は形の上では否定ではないにもかかわらず、意味的に否定のニュアンスを含んでいる。この点に関しては、日本語に訳すと「ほとんど食べませんでした」という具合に否定文になることが示唆的である。ところで、un peu と peu の「捉え方」の違いとは何だろうか。比喩的な言い方が許されるならば、いずれも主観的な視点のようなものが介入し、un peu ではそれがプラス方向に向けられ、peu ではゼロ方向に向けられると言えるだろう。このような視点の向きを「方向性」と呼ぶことにしよう。そしてこの視点がプラス方向に向いている場合、方向性が「肯定的」であると表現し、ゼロ方向に向いている場合は「否定的」であると表現しよう。un peu の方向性は肯定的、peu の方向性は否定的である。

なお、ある表現 X の方向性が肯定的か否定的かを識別する方法として、フランス語では次のようなテストが有効だと思われる。X et même Y という言い方が自然にできる場合に、Y が肯定的か否定的かを見してみるのである。un peu の場合は un peu et même **beaucoup** という言い方が自然であるのに対し、peu の場合は peu et même **pas du tout** や peu et même **rien du tout** という言い方が普通である。

さて、この観点から見ると、rarement の方向性は否定的、de temps en

temps と parfois の方向性は肯定的ということになるだろう¹⁾。même を含む自然な言い回しはそれぞれ rarement et même **jamais**, de temps en temps et même **tous les jours**, parfois et même souvent などである。さらに rarement の方向性が否定的であるのは、仏仏辞典²⁾で peu **souvent** と定義されていること、否定冠詞の de が使われる場合があること (Il y a rarement **de** difficultés pour obtenir un logement à Djibouti)、などが間接的な証拠になるだろう。

以上をまとめると、rarement、de temps en temps、parfois はいずれも低い頻度を表す限りでは類義表現であるが、rarement の方向性が否定的である一方で、残りの2つの表現の方向性は肯定的であるという決定的な違いがある。従って、rarement を「まれに」の訳語として提案する和仏辞典と、同じ「まれに」を de temps en temps、parfois と訳す翻訳は「まれに」の捉え方が正反対であるということになる。

では、どちらが適切なのだろうか。それとも、どちらも適切なのだろうか。この問題を解決するためには、「まれに」の意味の検証が不可欠である。

3. 「まれに」の方向性

それでは、「まれに」はいったいどのような頻度表現だろうか。低い頻度を表すことはすでに指摘した。問題はどのような方向性を持つかという点である。

まず「まれに」の辞書記述を概観してみよう。国語辞典では、「まれに」という項目はなく、「まれ」が見出し語としてあげられているだけである。これは、「まれ」が形容動詞(あるいはナ形容詞³⁾)であり、「まれに」「まれな」のように活用するため、わざわざ「まれに」を独立した見出し語にする必要はないと判断した結果であろう。では「まれ」の意味はどのように記述されているか見てみると、概ね「めったにないこと」のような定義が見られる⁴⁾。代表的なものとして『広辞苑』(岩波書店、第2版、1998)を引用しておく、
「(1) 多くないさま。しげくないさま。(2) めったにないさま。めずらしいさま。」とある。他の辞書も大同小異である。そして、特に断ってない以上、辞書では「まれ」の活用形は全て同じ意味であると考えているようであるか

ら、この記述がそのまま「まれに」に適用されると考えていだろう。

しかしこのような記述だけでは、やはり低い頻度表現であることは確認できても、その方向性が肯定的か否定的か判然としない。そこで、全く新しいテスト⁹⁾を提案したい。まず、医者が患者に向かって次のように発話すると仮定しよう。

(5) この薬を服用する場合、副作用がまれに出ます。

そしてこの医者が、この発話を論拠としてどのような主張を正当化できるか想像してみるのである。具体的には、「A なので、B だ」という構文の A の部分に (5) を挿入する場合、B がどのような文であれば自然であるか考えてみるのである。

まず次の二つを比較してみよう。

(6) この薬を服用する場合、副作用がまれに出ますので、気を付けてください。

(7) この薬を服用する場合、副作用がまれに出ますので、安心してください。

常識的な医者の発言としては、(6) は自然であるが (7) は不自然ではないだろうか。では、「副作用が出ます」についても同じテストをしてみよう。

(8) この薬を服用する場合、副作用が出ますので、気を付けてください。

(9) この薬を服用する場合、副作用が出ますので、安心してください。

(8) の「気を付けてください」は自然だが、(9) の「安心してください」は不自然である。そして最後に、「副作用が出ません」でも同じテストをしてみよう。

- (10) この薬を服用する場合、副作用が出ませんので、気を付けてください。
- (11) この薬を服用する場合、副作用が出ませんので、安心してください。

今度は、(10)の「気を付けてください」が不自然で、(11)の「安心してください」の方が自然である。

以上のテストから、「まれに出ます」と「出ます」が同じような特徴を持ち、それは「出ません」とは反対の特徴であることがわかる。つまり「まれに出ます」は肯定的な「出ます」により近いということになる。この事実をもって即座に「まれに」が肯定的に方向付けられていると結論することはできないが、一つの傍証になるのではないだろうか。

そして「まれに」の方向性が肯定的であるという仮定が正しいならば、この限りにおいて、「まれに」をrarementと訳すことは不適切で、むしろde temps en tempsやparfoisの方が近いということになる。そうなると、翻訳の方が適切で、和仏辞典にはやや不備があると結論せざるを得ない。

ちなみに、同様のテストによって、「まれ」の述語的表現である「まれです」の方向性は否定的であることが示唆される。まず「まれです」をテストするとどうなるか。

- (12) この薬を服用する場合、副作用が出ることはまれですので、気を付けてください。
- (13) この薬を服用する場合、副作用が出ることはまれですので、安心してください。

「安心してください」の方が自然であろう。では、肯定的表現「あります」はどうだろうか。

- (14) この薬を服用する場合、副作用が出る場合がありますので、気を付けてください。

- (15) この薬を服用する場合、副作用が出る可能性がありますので、安心してください。

「気を付けてください」の方が自然であろう。では、否定的表現「ありません」はどうだろうか。

- (16) この薬を服用する場合、副作用が出ることはありませんので、気を付けてください。
- (17) この薬を服用する場合、副作用が出ることはありませんので、安心してください。

「安心してください」の方が明らかに自然である。以上の観察から、「まれです」と否定的表現「ありません」の類似性が仮定できる。

なお、和仏辞典は述語的「まれです」「まれだ」の訳として非人称構文の *il est rare de / que* を提案しているが、*rare* が否定方向の表現である限りにおいてこの訳は適切であるといえよう。

まとめと今後の課題

以上で、「まれに」の翻訳を巡る実際的な問題に関しては一応の解決を見た。しかしさらに一步踏み込んで観察を続けると言語学的に興味深い問題がいくつか見つかった。主なものを三つ列挙する。

まず、「まれ」そのものの方向性は何かという問題がある。この問題を考えるために少し回り道をしよう。「100万人に1人の割合」という表現について考えてみよう。この表現は、低い頻度をあらわすのは間違いないが、客観的な数量表現である以上、方向性に関しては中立的と言うべきであろう。ところが、これを修飾語的に使用するか、述語的に使用するかの違いによって方向性が変化するという興味深い事実が存在する。

まず、修飾語的に使うとどうだろうか。

- (18) この薬を使用する場合、副作用が100万人に1人の割合で出ますので、気を付けてください。
- (19) この薬を使用する場合、副作用が100万人に1人の割合で出ますので、安心してください。

「気を付けてください」の方が自然ではないだろうか。だとすると、「まれに」と同じであり、「出ます」とも同じ結果である。

次に、述語的に使用する場合。

- (20) この薬を使用する場合、副作用が出ることは100万人に1人の割合ですので、気を付けてください。
- (21) この薬を使用する場合、副作用が出ることは100万人に1人の割合ですので、安心してください。

「安心してください」の方が自然ではないだろうか。そうすると、「副作用が出ることはまれです」および「副作用が出ることはありません」と同じ結果となる。

以上の観察が正しいとすると、表現そのものの方向性が肯定的でも否定的でもない場合でも、それが修飾語的か述語的かという違いによって方向性が生まれる可能性があるということになる。ということは、「まれに」が肯定的方向性を持ち、「まれです」の方向性が否定的であるからといって、「まれ」の方向性が肯定的であるか否定的であるかは必ずしも予測できないことになる。

第二の問題として、なぜこのような現象が生じるかという点があげられる。「まれ」だけではなく、「100万人に1人の割合」という表現でも同じ現象が確認できたが、述語的用法と修飾語的用法で解釈が変化することの理由は今のところ不明である。ただ、おそらく「副作用が出ることは……です」という発話の中心は「……です」の部分であり、ここに少量表現が挿入されると全体として否定的な意味合いになるのに対し、「副作用が……出ます」

という発話の中心は「出ます」の部分であり、「……」の部分でどのような修飾がなされても、「出る」ということが緩和されたり強められたりするだけで結局「出る」ことに変わりはない、という意味構築のプロセスが存在するからではないかと推測される。

最後の問題として、上述のように「まれに」を *rarement* で訳すケースも存在することを指摘しておきたい。一例をあげよう。

- (22) そんな訳で耳を引っ張られることに関しては、猫は至って平気だ。それでは、圧迫に対してはどうかというと、これも指でつまむ位では、いくら強くしても痛がらない。さきほどの客のように抓って見たところで、極く稀にしか悲鳴を発しないのである。(梶井基次郎、「愛撫」、『梶井基次郎全集』、第1巻、筑摩書房、1999、p.202)
- (23) C'est ce qui explique la totale indifférence des chats quand on tire leurs oreilles. Pincez-leur maintenant les oreilles entre vos doigts: si fort que vous le fassiez, ils ne souffrent pas non plus. On a beau les pincer comme le visiteur de tout à l'heure, ils ne poussent que **rarement** un cri de douleur (Kajii Motojirô, «Caresses», in *Les cercles d'un regard : le monde de Kajii Motojirô*, traduction et commentaires de Christine Komada de Larroche, Maisonneuve et Larose, 1987, p.111)

本稿の結論は、「まれに」を *rarement* で訳すことが不適切であるということであったが、一見するとこの例はその反例のように思われる。しかし詳しく検討してみると、「まれに」が *rarement* と訳されるケースではそれぞれ何らかの要因で「まれに」の方向性に変容が生じていることが確認できる。例えば(22)の例であれば「稀にしか」の「しか」の部分が重要なポイントになる。

以上の問題は、稿を改めて論じたい。

注

- 1) P.-Y. Raccah (éd.), *Topoi et gestion des connaissances*, Masson, Paris, 1996 の序文で Oswald Ducrot が rarement に言及しながら同様の指摘をしている。また、少し枠組みは異なるが、Ch. Molinier, «Les adverbes de fréquence en français», in *Lexique 1*, Presses Universitaires de Lille, 1982 および H. Gezundhajt, *Adverbes en -ment et opérations énonciatives*, Peter Lang, 2000 も様々なデータに基づき rarement の「方向性 orientation」について論じている。
- 2) *TLF, Grand Robert, Grand Larousse* は全て peu souvent と定義している。
- 3) 益岡隆志、田窪行則、『基礎日本語文法・改訂版』（くろしお出版、1992）の用語による。
- 4) 『大辞林』（三省堂、1995）「数がきわめて少ないさま。非常に珍しいさま。」、『国語大辞典』（学研、第2版、1978）「めったにないこと。たまにしかないこと。」、『国語辞典』（岩波書店、第3版、1979）「たまにしか起こらないこと。めったにないこと。」、『新明解国語事典』（三省堂、第5版、1997）「めったに無くて、珍しい様子。」など。注目に値するのは、『日本国語大辞典』（小学館、第2版、2001）の「(1) 全くないというわけではなく、ごく少し存在するさま。数少なく珍しいさま。稀少。(2) 機会や場合が、ごく少ないさま。たまさか」という記述の(1)の前半部である。「少し存在するさま」という記述が「まれに」の方向性が肯定的であることを示唆しているのならば、本稿の結論に近い。
- 5) このテストは、Oswald Ducrot が *Les échelles argumentatives*, Minuit, 1980 で提案した方法論を単純化したものである。このような観点をさらに精密化し、様々な表現の記述や分析を試みた Ducrot および共同研究者の業績は膨大なものである。詳しくは M. Carel (éd.), *Les facettes du dire. Hommage à Oswald Ducrot*, Kimé, 2002 の文献リストを参照されたい。また、本稿の筆者も同様の枠組みを応用し、以下のような研究を発表しているので参考にさせていただきたい。「条件文の意味と使用」、『仏文研究』、京都大学フランス語学フランス文学研究会、第30号、1999。「si と même の意味論的結合関係」、『フランス語学研究』、日本フランス語学会、第34号、2000。「談話の方向性と意味」、『藝文研究』、慶應義塾大学藝文学会、第79号、2000。「Le concept d'argumentation interne : à quoi ça sert ?», in M. Carel (éd.), *op. cit.*